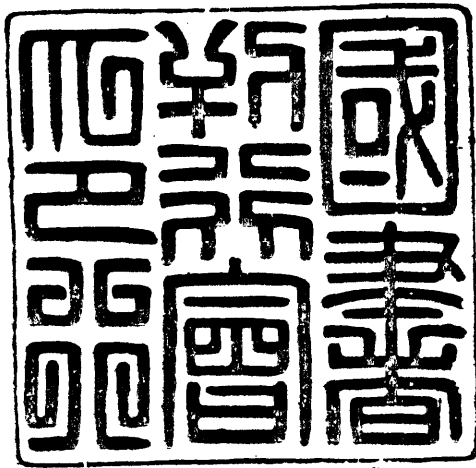


橘守部全集

第九



# 俗語考

## 凡例

一、此書はやく古言海といふを輯めんとて、何くれの書どもより、かき抜おきつるあまりなり。かゝるえりあまりなりけれど、さすがにしみのすみかとなしはてんもあたらしとて、こたび乞もとめける人の爲に、いさゝかついでを改て巻とはなしつ。さればひたふる俗語ならぬも有べけれども大かたのうへにつきて、かくはおふしつるになん。

一、巻のをちくに語釋、引書のながきあり、みじかきあり。其ながく多きは雅言の方の引のこりなり。其みじかくすくなきは、既に雅言の方に委く出づるによりてなり。さばれ猶、手をくはへて前後ふさはしかるべく直すべきわざなりけれど、いとまなければ、其まゝにさしおきぬ。もとより俗言にさまで註すべくもあるべからねば、大かたは今の言にむかしの言を引合せて、其うへは見む人

のこゝろにまかせんとぞよ。

一、言の部立は、節用集などに擬ひて、天象、地儀等の門を分てものせんかた、便りよかるべけれど、かゝる俗言の上に、引用こともあらざめれば、今はたい何ごとのうへをも一つにこめて、言の數もてついでたり。猶それも通俗にはいろはうたの次第にものせむかた、似つかはしかるべきを、凡て言を考へむには、同じ根ざしの通音並べ見むこそ、心得やすからめとて、五十音もて分ちつ。

一、言葉ごとに標を立て、分ち擧つれど、をりくは其類語を、一つに合せて、たとへば兄といふ下に、姉、おとうと、いもうとをも出し、又いろと云下に、いろ事、いろをする、いろ男、いろ女などいふ言どもをも、合せて出せるたぐひもすくなからず。是をもし悉く分ちて出さば、其詞の數今の倍にもなりて、打見は盡せるがごとくも見えぬべけれど、かゝる物に同じ引書を又引むもとて、合せて出せる事の多きなり。かゝれば此書はもはら一部を見わたして、ことの心をさとりてまかし。

一、おなじ詞もいひなしによりて、二言ともなり。

三言五言ともなる多かり。それもなるべき限りは、一つ所に釋すべき心なりつるを、いとまなくて人にえらばせたりければ、もと書抜おきてし紙札にひかれ、又言の延約りによりて、ところ／＼に出などして、すべて心にあらぬ事多かり。さりけれど今を改めんものうくて、其まゝにしたゝめつ。

一、また其詞に雅言の格に出せると、俗言のいひなしに隨へることありて、一樣ならず。たとへばあまゆるはあまえと出し、甘はあまきと出し、肥はこゆると出し、瘦はやせると出せるがごとし。こゆるは雅言の格なり、やせるは、俗の訛りなり。されどもやするとは、世俗の耳にうとげなるゆるに凡て雅俗を混じていろ／＼に出せるなり。見む人あやしむ事なかれかし。

一、今かくついで見れば、漏たることいも多かれど、かくてだに二十餘卷となりつれば、先此まゝに一たび巻をとちめつ。もしかゝるをさな言も、うひ學の人のたよともなれらば、狩のこしつる書ども、いとあまたなりければ、ふたゝび思ひお

こして、又續編をもかき繼べし。故撰びたがへて入所をひがめたるなど、各皆切とりて後のかきつぎに合せんとて殘しつ。

天保十二年十一月十四日

守 部